

2025年 宗会（常会）宗務総長演説（要旨）

2025年5月29日

「改革」の時機を共に ― 慙愧心を賜りて

ご参会、誠にご苦勞様でございます。今常会の開会にあたり、私ども内局の基本姿勢及び重要宗務の方針について申し上げます。どうぞ宜しくお願いいたします。

1. はじめに

はじめに、昨年の元日に発災した「能登半島地震」以来、今なお非常に厳しい環境の中におられます皆様に、衷心よりお見舞いを申し上げます。

宗門として、息の長い支援を継続し、一日も早く、穏やかな日常を取り戻せますよう、力を尽くします。

2. 宗門における「改革」の本義

【現代と宗教】

さて、大規模災害と悲惨な事件が続く現代社会。我々はその大きな渦の中で、加速度的に他者との関係性を喪失し、国も地域も、また世代間においても、「自分さえよければ」という感覚が刻一刻と強まっております。

今年は、日本にとって戦後80年ではありますが、世界ではウクライナとロシアの戦争、イスラエルにおける武力衝突等が今なお続いております。

また、国内における様々な出来事を見ましても、その根本は、真宗仏教が教えるところの「我執・我愛の欲望拡大」に歯止めがかからない、非常に危険な状態であり、正に如来に悲しまれている「人間のすがた」が露わになっておるものと感じます。

「今だけ・金だけ・自分だけ」。法話等の折によく聞かれる言葉ですが、この言葉自体、私が耳にして既に10年以上が経ちます。ということは、「そうあってはいけない」と知りつつも、その生き方を手放すことができない。誰もがそのような生き方では幸せは来ないと、心の底では思っている。けれども現実はそのようにしか生きられない。どれほど科学技術が進歩してもその点は変わりありません。

ここに、本願の名号が変わらずに今日まで至り届いている理由があります。正しく人知、人間の理知分別の限界が知らされるということです。

道理から申しますと、人間はその字の通り「間がら（関係性）を生きる」ものでありますから、宗教の根幹である「救済」、「救われる」ということも、「間柄が救われる」ということでなければ、宗教も救済も成り立ちません。それが道理であり、実際、本心では誰もが豊かな関係、潤いのある生活ということを望んでいる。しかもその希望は常

に、例え細い糸のようであっても続いている。けれども現実生活は、他と衝突し続ける。一人ひとりが実は一番大事な、最も身近な人をこそ傷つけてしまう。これがあらゆる人が抱えている、歴史的・社会的、人間の根本問題。我々の人生における最大の苦悩ではないかと思います。

以前から、また昨今でも、「寺離れ」「宗教離れ」という言葉が聞かれますが、離れているのは一体何が離れているのでしょうか。それは、その時々で転変する「人の関心」だと思います。もっと言えば、人間の分別のモノサシにおいて、離れているに過ぎないのだと思います。時代としては、むしろ現代社会の実態である「苦悩」そのものが、実は宗教を求めている。「真実の道標」なるものを、強く願い求めている証拠であると、私は受け止めております。

【 人と法 】

さて、こうした厳しい現実の中にあって、我が宗門に求められておりますことは、申すまでもなく「宗教の真実性の発揮」であります。それを先人方が「同朋会運動」ということで表現してくださり、今日まで受け継いでまいりました。ここに「人のまこと」がある。「真宗再興」の道、人が人となる道標がここにあると。その証しは何か。証しは南無阿弥陀仏の声〈みな〉である。その声〈みな〉を今現に聴いている者は誰でしょうか。我々一人ひとりであります。

つまり「宗教の真実性」とは、どこかの誰かがいつか証明する、ということでは決してなく、我々一人ひとりのところ、自身の日常のところ、証しされるものであり、その他に証明の仕様がなかったのであります。

その意味で、真宗仏教が大事に伝えてきた教語に「人と仏法は不二である」、互いに離れないという言葉があります。これは言い換えれば、大乘至極の仏道、浄土真宗とは、人の姿に顕れるということでしょう。教えは教理だけ、文字だけでは我々の現実とはならない。必ずそこに「ひと」として現れる。そして教えが伝わるということも、教理、論理によって伝わるのではなく、その教えに生きる人、その姿によって伝わってきたという事実がございます。念仏の説明が伝わるのではなく、「念仏そのもの」が伝わるのであります。

宗祖親鸞聖人は、『教行信証』の後序に「然るに、愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」と、宗祖の「廃立」を銘記されています。これは言わば宗祖の決意、それも頭で考えたような決心ではなく、法然上人、そのよきひとの申した念仏との値遇によって、初めて賜ることのできた「真実の道標」の表現でありましょう。この時、宗祖は、法然上人の何に感動されたのでしょうか。その卓越した知識でしょうか。才覚でしょうか。決してそうではなく、宗祖は法然上人の生き様、お姿、「その存在」に感動して本願に帰されたに違いない。すなわち仏法は文字だけでは成立しない、伝承

されないのであります。仏法に生きる人、その人の姿によって証しされ、今日まで伝承されてきたということでもあります。

【 改革の基礎・質的転換 】

さて、現今の宗門の最重要課題は、申すまでもなく「宗務改革」、「行財政改革」の推進であります。「改革」とは、これまでのやり方を適切に改め、より良い形に転ずることでもあります。そして事を改める、転ずるという時には、そこに必ず基礎・基軸が要る。礎となるもの、軸となるものが必要であることは言うまでもありません。では、宗門の改革に際し、我々は今、何に基礎を求めるのか。どこに基軸を見出すのか。ここが今、喫緊の問題であります。

この点について私自身、各位と同じく今日まで考察を重ねてまいりました。そして先日、一つの言葉に目が止まりました。それは今からちょうど50年前の本山議会における嶺藤宗務総長の演説であります。機関誌『真宗』での題名は「教団の質的転換」となっております。

嶺藤総長はその演説において、曰く「まず克服されねばならぬものは、いたずらな教権主義と、私的感情のみに拠った誤った経営主義であります。宗門が教法によって統理された教団として、すなわち教法を聞思し、かつ実践する組織体として、その質的転換を達成する方策が、基本的目標として定立されねばならない」と。

私はここに、現在我々が直面しております「改革」の基礎・基軸がある。どうしても外してはならない、それを外しては宗門の改革は成り立たない一点が教示されていると思います。それは「教法を聞思し、かつ実践する」という真宗人としての使命感・責任感に裏打ちされた、宗門人の「反応の大事」が表現されています。

【 我らの宿題 】

「教団の質的転換」を期し「教法を聞思し実践する」。この言葉の背景について申しますと、かかる表明がなされたのは1975年の時点です。つまり「宗憲改正」より前であります。宗門はここから、「分裂報恩講」「即決和解」を潜って「宗憲改正」という重大事を成し遂げました。ということは、嶺藤総長がここに掲げた主旨は、「宗憲改正」における直接目標の一つであるわけです。そういう意味で、「教団の質的転換」を期し「教法を聞思し実践する」ことが、先人から我々に託された「宿題」である。そのように私は受け止めます。

では具体的に、現宗憲のどこにその「宿題」が表記されているのか。それは、前文にあります。曰く「宗祖親鸞聖人は、顕浄土真実教行証文類を撰述して、真実の教たる佛説無量寿経により、阿弥陀如来の本願名号を行信する願生浄土の道が、人類平等の救いを全うする普遍の大道であることを開顕された。（中略）爾来、宗門は長い歴史を通して幾多の変遷を重ねるうちには、その本義が見失われる危機を経てきたが、わが宗門の至純なる伝統は、教法の象徴たる宗祖聖人の真影を帰依処として教法を聞信し、教法に

生きる同朋の力によって保持されてきたのである」と。この一文に、「宿題」の趣意が込められております。私自身、以前はここをそこまで読み取れておりませんでしたけれども、宗門の現状とその背景を想う中で、実はこの「前文」の一文こそ、我々に託されている「宿題」であったと。そのように私は受け止め直しました。

宗祖が普遍の大道であることを開顕してくださったのは、「誰のため」なのかという問題です。一体誰のために宗祖は『教行信証』を書き遺してくださったのか。誰のために「帰命無量寿如来」の声を遺してくださったのでありましょうか。

他でもない、この私のためであります。私のためなのです。ですから本日敢えて申し上げますなら、議員各位をはじめ、現に宗門に縁ある一人ひとりのために、宗祖は願生浄土の道を開顕してくださったわけです。その意味で、我々は「わたくし、ひとり」というところにおいて、既にして「道」が与えられているのであります。

つまり、宗門における「改革」とは、「一人ひとり」の改革でなければならない。我々一人ひとりの改革が、すなわち宗門の改革である。自分が教法によって転ぜられる、ひっくり返されるということなしに、法制度や組織機構をどれだけ変えたところでどうにもならない。先ほど申した「今だけ・金だけ・自分だけ」に留まるだけであります。それでは本質的な意味で改革にはならない。一人ひとりが教法によって改革される、転ずるということなくして、宗門における改革は成立しようがない。そのようなことを、私はこの嶺藤総長の言葉から改めて教えられます。

宗祖は、『教行信証』の総序において、「円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑を除き証を獲しむる真理なり」と銘記されています。これは「南無阿弥陀仏が真実である」ということです。南無阿弥陀仏こそ真実である。他に真なるものがあるのではない。また他を探し回るようなことでもない。どこまでも南無阿弥陀仏が真実であると。この一点を、私は宗門の大きな転換期にあつて、必ず押さえ直す必要があると、強く感じます。

「悪を転じて徳を成す」。「転悪成徳」。これこそが「改革」でありましょう。南無阿弥陀仏による「意識改革」、「認識の変革」です。ですから「教団の質的転換」を期し「教法を聞思し実践する」とは、私が念仏申すことに他なりません。何故なら、人は自分の意識、自分の感覚を、自分の考えで改めることができないからであります。それを仏陀は「凡夫」と教えてくださっている。我ら凡夫、「ただのひと」であります。我ら凡夫であるからには、自分の考えで自分を変えることなど、絶対に不可能である。必ず「気づかされる」ということを通さなければ、何一つ、変わらない、改まらないのであります。

一人の意識改革なしに、宗門の改革は成り立たない。大変厳しい道でありますけれども、この一点をお互いに改革論議の基礎・基軸として堅持いたしまして、これからの宗

門を共に形づくっていきたく思います。それこそが「教団の質的転換」という「我らの宿題」に応える一道であると、思料いたします。

【 教団の今 】

「教団の質的転換」を期し「教法を聞思し実践する」にあたっては、教勢調査によって明らかにされた「教団の足もと」と、その背景にある南無阿弥陀仏によって明らかにされる「自身の足もと」。それらを具に把握することが要となります。

昨年実施いたしました第8回「教勢調査」は、調査対象寺院の95.9%から回答をいただき、大変厳しい状況にある能登教区の寺院からも86.4%もの回答をいただきました。改めて厚く御礼を申し上げます。

今回の調査結果における分析について述べさせていただきます。宗門は、人口減少といった国勢の停滞や、移動社会による転居や核家族化、門徒の死去をきっかけに寺院と門徒との関係が途絶える等の影響により、「門徒の減少、教化組織の衰退・解体であり、宗門の基盤の揺らぎが着実に進行しつつある」と、危機感を持って調査専門員が指摘されました。

また、各寺院が様々に門徒や地域の方々との接点を求めて、将来の取り組みを模索している様子も見受けられました。それらは「教えや寺院運営の世代間継承」、「転居門徒との関係性」、「寺院と門徒・地域との関係の希薄化」といった諸課題に対応するものでありました。つまりそこに、危機感を持って向き合う寺院の姿があるのです。

危機感の可能性です。同朋会運動の始動から60有余年。いつの時代も、その時代社会に生きる人々の「今」を大切にしながら、教学を時代社会に生きた教学とする営為が続けてきた歴史が、1カ寺1カ寺にあります。

その歩みは、教えに足もとを照らされながら、聞法求道する教団であり続けてきた歴史でもあります。社会の課題を我が課題として、あらゆる人々を同朋としていただき、同朋社会を顕現せんとしてきた不断の歩みです。この歩み、すなわち同朋会運動が、私たち一人ひとりに紡がれてきた事実が、誠に以て尊いと言えます。これが近現代における教団の歴史であり、故安富信哉先生の言葉をお借りすれば、「近代教学を大切にしつつ、現代教学を表現」する歩みであり、「同朋社会の顕現」を使命とする教団が続けなければならない営みであったのです。

これこそが社会から求められている宗教法人としての公益性でもあり、その1カ寺を担う使命を、教師になる方々にも学んでいただくべく、施策を進めてまいります。

そして、各寺院が「一人の念仏者の誕生」を願って、創意工夫を施しながら大切に続けられてきた教化事業そのものが、同朋会運動であります。そこに、1カ寺の、一人の運動の具体性が、足もとが、「既にしてある」のです。各寺院のその歩みは、必ず未来に、今につながっているのです。届けられし南無阿弥陀仏あってこそこの私、南無

阿弥陀仏によって召される僧伽を確かめ合うその場に、「自信教人信の誠を尽くし」、「人類に捧げる教団」確立への、大きな可能性を有しているのです。

多様性が求められる時代社会にあって、「人々が集う」ことで大切にされてきた「受け継ぐべき本来性」と、変化の中で「変えていく柔軟性」、この両視座を大切にしつつ、本調査結果を、様々な形に変容する宗教行事、その奥に内在している人々の宗教心を確かに受け止め、新たな教化のあり方を模索する根拠と捉えていきたいと考えております。

各教区においても、様々な数値を、向後における教区運営のあり方を見据える根拠として、活用いただきたいと願っております。

3. 2025年度の主な取り組み

それでは、これまで縷々述べました内容を立脚地として、2025年度の主な宗務について、3点申し上げます。

【宗務改革】

1点目は、宗務改革について。行財政改革の取り組みは、変化の著しい時代社会にあっても、持続可能な宗門の基盤整理を図るべく、4つの柱で進めております。

まず、「同朋会運動の更なる推進」、特に「教化に関する情報発信の充実」として、真宗同朋会の機関紙である『同朋新聞』のリニューアルに着手しております。

真宗教化センターと出版部が中心となり、宗務所の各部門が連携して、新聞を製作していく体制を整えていきます。

ご承知の通り、『同朋新聞』は、真宗同朋会の機関紙であり、発刊以来63年の星霜を経てきた約75万部を発行している宗門最大の情報媒体であります。混迷する時代社会に、今宗門が何を表現しなければならないのか。弛むことなく大切にされてきた新聞の使命を改めて振り返れば、ひとえに一人ひとりの門徒に本願念仏の教えを届け、「同朋の会」を立ち上げていくことに結実されと考えています。

仏教を聞信し「問い」をいただく生活とはどのようなことなのか。宗祖の明らかにされた念仏の教えを聞き、生涯を送られた先達が感動されたことは何であったのか。この教団がどれほど多くの方々と結びついているのか。教団の社会に対する不変の使命とは何か。宗門全体の姿を幅広い世代の門徒にお伝えできるよう、努めてまいります。

そして、時代社会の要請に応える発信と配布の在り方を模索しつつ、同時に各種媒体ごとの強みを活かした展開をしてまいります。

ご門徒に配りたくるような『同朋新聞』、その配布拡大については、各教区・各寺院・各位のところでも、具体的な検討をぜひお願いいたします。

関連して、ホームページやSNSについても、仏教の教えをはじめ、東本願寺の価値や魅力がこれまで以上に効果的に伝わり、多くの人に宗門が選ばれることに寄与する情報発信の体制構築を目指して、取り組みを進めております。

いずれにいたしましても、次世代にもこの教団を荷負っていただける意識の醸成、この教団に所属していて良かったという実感、そして、教団が持っている願いの深さを感じ取っていただけるような情報発信をしてまいります。

次に、「財政の健全化と自主財源の確保」として、宗派の適正な財政規模の明確化と、真宗本廟を確実に相続する積立金の確保を期した取り組みや、宗派自主財源の更なる増収に向けた検討について。

特に「大谷祖廟の総合整備」については、一昨年の常会演説において、私は宗憲前文に「宗門の原形」、「はじまりの一滴」があることを述べました。曰く「宗祖聖人の滅後、遺弟あい図って大谷の祖廟を建立して聖人の影像を安置し、ここにあい集うて今現在説法したもう聖人に対面して聞法求道に励んだ。これが本願寺の濫觴であり、ここに集うた人びとが、やがて聞法者の交わりを生み出していった。これがわが宗門の原形である」と。また、覚如上人の『報恩講私記』においても、諸国から群詣して「廟堂に跪きて涙を拭い、遺骨を拝して腸を断つ」と、真宗教団成立の歴史的事実に触れました。

そのような大切な場所を整備し、亡き方を縁として仏法を相続していく場づくりを進めるため、宗務審議会における基本構想に基づき、条例による委員会を設置して、複数年に亘る総計画を立案し、着実に実行してまいります。

また、同審議会の答申でも触れられている「東本願寺真宗会館」と「沖縄別院」においても、納骨や預骨に関する施設整備が喫緊の課題となっていることから、東京教区や沖縄の関係各位と十分な連携を保ちつつ、新たな法縁づくりに資する取り組みを進めて行きたく念じております。

次に、「大規模災害被災教区の教化・運営を支えるための体制づくり」として、今宗会を経て「災害時特別教化交付金」を新設することであります。

宗門には、これまでの災害対応によって多くの知見が蓄積されていますが、それらを活かしていくためには見直すべき事柄もあります。その一環として、災害につよい教団づくりを目指し、今常会において、災害による緊急時の教区運営に関して、一日でも早い教化の現場・聞法場の回復を期した、支援体制の確立に必要な条例を提案するとともに、既に本年から「寺院・教会の施設に係る新たな復興共済制度の検討」に関する宗務審議会を設置し、これまでの大規模災害において蓄積されてきた諸課題に基づき、宗派の共済・保険制度に関する審議を始めていただいております。

次に、「教区及び組の改編・門徒戸数調査との連動」として、教区改編については、今宗会を経まして、「山陽四国教区」が誕生いたす運びであります。関係各位のご尽力に、深甚の敬意を表するものであります。

【 教化研修や教団の将来像構築に向けた取り組み 】

2点目は、「2026年度以降の教化研修や教団の将来像構築に向けた取り組みの策定」について。

まず、3年一体型の最終年度を迎える「教化研修計画」は、教勢調査の分析結果や行財政改革の進捗等を含め、2026年度以降の取り組みを策定してまいります。

既に、「人の誕生」を期した取り組みとして、「青少幼年教化推進研修」が始まっており、第5期「教化伝道研修」も実施いたします。また、慶讃継続事業についても、事業の現況と見通しを精査しております。

関連して、真宗本廟への上山促進については、その環境面において、おかげさまをもちまして、阿弥陀堂門・鐘楼・手水屋形といった重要文化財の保存修理事業が無事完了いたしました。関係各位に御礼を申し上げます。

この本廟を次世代に相続していくためには、まず以て本廟に参拝いただくことが肝要です。御正忌報恩講の参拝者数で言えば、コロナ前に比して7割近くの復調が見られます。「本廟に直参する」「年に一度は本廟へ」ということが大切に伝統されてきた宗門において、宗祖と出遇い、全国の人と出あう。1人の歩みが宗門の歩みとなる。このことを意識できるのが本廟参拝・本廟奉仕であります。

教勢調査の結果においても、本廟参拝・本廟奉仕に取り組みたいというニーズを見て取ることができましたので、今後とも、1人でも多くの方に本廟に触れていただく機会を創出してまいります。

次に、「別院の将来構想」については、全別院にアンケートを実施し、現地視察等も通して現状把握に努めました。次年度からは、宗務審議会の答申に基づき、条例による委員会を設置して、別院の具体的な将来像を創出していけるよう協議してまいります。

専任輪番会や審議会の折にも私から申してまいりましたが、喫緊の改革が必要な別院を抽出した上で、現場にお任せをするだけではなく、内局も現地に足を運び、共に取り組んでまいります。

次に、大谷専修学院については、学院の運営体制を整える必要があるため、学院生の募集を中止いたしております。学院への入学及び教師資格取得をご検討いただいていた皆様方には、大変ご迷惑をおかけいたしましたこと、改めて深くお詫び申し上げます。

信國淳先生曰く「仏の教育的生命」、それに出遇う大切な場として存在してきた学院であります。既に今後に向けた検討に着手しており、宗務審議会を設置し、1日でも早く学院生の募集を再開できるよう、努めてまいります。

【 是旃陀羅問題の課題共有 】

3点目は、「是旃陀羅問題の課題共有」について。これまでの取り組みから、テキスト『御同朋を生きる』を通し、『仏説観無量寿經』をいただき直すことを課題といたしましょう。

しかし、經典というのは、その文字だけが内容ではありません。時代性、地域性、そしてその説かれ方も含めて、「經典の内容」「經典のはたらき」でありますから、正依の聖教である「観經」を、差別的なはたらきを持つような説き方をしてきた僧分の責任は重いと言わざるを得ません。もっと具体的に申しますと、「この私に、観經を法事の現場で読誦する資格があるのか」ということが突きつけられているのだと、強く受け止めております。

そういった歴史や現代という時代性も踏まえながら、大谷派が法事において經典を読誦する意味と、是旃陀羅の課題を踏まえ、具体的な法要はどうあるべきかを課題とする宗務審議会を開きました。

なお、テキストを活用した教区学習会の開催や、教区・組での継続的な学びを推進する人の養成等については、解放運動推進本部と教学研究所において継続して傾注してまいります。

したがって、本審議会は、法事の現場での經典読誦の意味とその読法という、七つの施策における次のステップに向けた歩み出しとして位置付けるものであります。

七つの施策は、既に6年前からお示ししております。それらは、我々の「今」の問題であり、同時に遂行すべき課題であります。待ったなしであります。

以上、主な取り組みを縷々申させていただきましたが、改革にはBESTなどというものはなく、必要なのは時代社会に生きる人々の「今」を大切にしつつ、BETTERを選び取る柔軟な心と体制であります。

今まで通りの現状維持ができない時代において、行財政改革を遂行していくには、先述の通り、一人ひとりの「意識改革」が必要となります。これら幾多に亘る取り組みは、いずれも行財政改革における「意識改革」の根底を支えるものになると思料いたします。

4. おわりに

【 宗祖からいただくスタート 】

本年に入り、教区慶讃法要が各地で厳修されております。私も新門と各地へお参りさせていただいておりますと、多く聞かれる言葉が「ここからがスタート」という声です。

人々が一堂に集い確かめられるその光景に、宗祖に触れさせていただく慶讃法要の持つ大きな意義を実感することとなります。

昨年の御正忌報恩講の折、阿弥陀堂での「見聞『教行信証』坂東本」に、1,000名以上の方が参加してくださいました。多くの方はスクリーンに坂東本が映った途端に合掌なさいます。私の前におられた方は「もったいないこっちゃ」と仰いました。きっと加賀の方でしょう。ものをいただいた時に使う言葉です。つまりその方は、坂東本を宗祖からいただいた宝物。「念仏申せ」と伝えてくれる、丁寧な丁寧な「お手紙」だと受け止められたのです。これほど宗祖を身近に感じることはあるでしょうか。

「直筆に触れる」ということは、我々が考える以上に、本当に大きな力を持っております。宗祖の御誕生と立教開宗が自らの学びとなるよう、新刊の『坂東本カラー影印縮刷本』や、先に刊行しております『真宗聖典 第二版』、『宗祖親鸞聖人著作集 一・二』とともに、「教法を聞思し実践する」視座をいただいてまいりたいと思うことであります。

最後に、私は今、宗門は大きな転換期に差し掛かっていると受け止めております。教団の質的転換を期し、教法を聞思し実践する「真宗再興」の道。それを成り立たせるものが「南無阿弥陀仏」の声であります。私は、そう確信する「ひとり」であります。

共に、御名を聞く一道を願うところであります。

以上、今議会に際しての宗務執行方針をお伝えいたしました。ご清聴、深く感謝いたします。有り難うございました。

以 上